

論文番号 229

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

The association of Tobacco and Alcohol consumption with the use of health care services in Spain

スペインでのたばこ・アルコール消費と医療サービス利用との関連

執筆者

Artalejo FR, Manzano BA, et al

掲載誌 (番号又は発行年月日)

Prev Med 2000; 31: 554-561

キーワード

tobacco, alcohol, healthcare services

要旨

(背景)医療サービスに対するタバコとアルコールの影響についての情報は乏しい。本研究では、タバコとアルコールの摂取と医療サービスとの関連をスペインにおいて検討した。

(対象と方法)対象としたのは1993年のスペインの国民健康調査で、入院・入所していない16歳以上を代表する21,120人の無作為抽出された人達である。喫煙と飲酒の情報は世帯単位の間診で得られ、同時に過去1年間の入院と救急医療の利用、過去15日以内の外来受診を把握した。

(結果)非喫煙者と比べて、男性の1日20本以上の喫煙者は、有意ではないがより入院しやすく(OR 1.31, 95%C.I. 0.89-1.93)、有意に救急医療を利用していた(OR 1.51, 95%C.I. 1.13-2.01)。女性の1日20本以上の喫煙者でも、有意ではないがより入院しやすく(OR 1.62)、有意に外来受診をしていた(OR 1.35)。非喫煙者に比べて、過去喫煙者は男女ともすべての医療サービスを多く利用しており、女性の救急医療以外は有意差を認めた。男女ともアルコール摂取量と入院、救急医療は有意な負の量・反応関係を認めた。これらの関係は年齢層別に見ても、年齢、人口規模、自治体、社会経済的地位、余暇の身体活動量、喫煙(または飲酒)を調整しても、ほぼ同様の傾向を示した。

(考察と結論)喫煙者と過去喫煙者は、非喫煙者に比べてより多くの医療サービスを利用していた。喫煙を制御することは、医療サービスや人的、経済的コストを減らす上で有効である。しかしながら、アルコール摂取量が増えると医療サービスの利用は減少していた。ただし、本研究は断面研究であり医療サービスの利用に至るような状況が飲酒量を減らしている可能性があること、自己申告のため特に大量飲酒者でアルコール量が過小に見積もられているかもしれないこと、生涯非飲酒者と禁酒者の区別が本研究ではなされていないことなどから、本研究結果を、たとえ中等量であってもアルコール消費の促進のために利用すべきではない。